

史料レスキュー技術の体験講座 を実施しました（2026/9/29）

テーマ：歴史資料（史料）レスキュー、紙媒体の応急処置、古文書デジタル撮影
会 場：東北大学災害科学国際研究所（宮城県仙台市）

東北大学災害科学国際研究所では、地震や水害などにより失われつつある歴史資料の保全活動にも力を入れています。佐藤大介准教授（歴史文化遺産保全学分野）は「史料レスキュー技術の体験講座」を9月29日に当研究所で開催しました。東北大学の学生や文化財保護に携わる自治体職員など10人が参加しました。

午前中は、松下正和先生（神戸大学地域連携推進本部特命教授）を講師に招き、被災した古文書の応急処置の実習を行いました。処置には応急的な一次処置と、修復を意味する二次処置があります。二次処置は専門家が担いますが、一次処置は学生やボランティア市民など専門家以外も担うことができます。水に濡れた紙の史料はとにかく水分を取って乾かすことが大切で、今回の実習では新聞紙やキッチンペーパー、空気を抜いて衣類を圧縮する袋など、安価な道具を使う処置方法を体験しました。また、大量の史料の処置には時間と手間がかかるため、一時的に冷凍することも大切だと教わりました。

午後は佐藤大介准教授が講師となり、古文書のデジタル撮影の実習を行いました。三脚にデジタルカメラをセットし、下に史料を置いて、すべてのページを撮影していきます。撮影した画像は自動読み取り等でも活用するため、まっすぐに置き、しわにならないよう伸ばし、余白も撮影するなど、さまざまなコツがあります。今回の実習では、旧家に残る古文書の持ち主の方にも参加いただき、当日持参していただいた古文書をお借りして撮影しました。

地域や家庭には文書、日記、手紙、写真など、その地域や家族の歴史伝える史料がたくさん残っており、すべてが貴重です。東日本大震災の津波では多くの史料が被災しましたが、レスキュー活動によって守られた史料や、震災前にデジタル撮影をしていたおかげで、実物が失われても記録が残った史料もあります。

当研究所ではこれからも、保全活動を通じて記録や記憶を守り、歴史学の研究および地域のレジリエンス向上に貢献していきます。

文責：今野公美子（広報室）



水に濡れた史料の応急処置実習



古文書のデジタル撮影について説明する
佐藤大介准教授